

無量壽

平成28年8月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語

24

文明十五（一四八二）年に、京都郊外の山科やましなに本願寺を建立し、蓮如上人はようやく本願寺の再興を果たすことができになりました。

この本願寺は、当時から「城」と呼ばれていたように、周囲に堀と土塁を巡らし、面積は三〇町歩もあつたと言われています。

この頃蓮如上人は七〇歳に近い年齢でおられました。長年の念願であつた本願寺の再興を成し遂げ、浄土真宗の教えを広める基礎が固まつたことから、延徳元（一四八九）年には五男の実如上人に後を譲られ、大坂石山おおさかの地に石山御坊を建てて隠居所とされました。

蓮如上人は生涯に五人の奥様をもらい、二七人の子（一三男、一四女）を設けられました。

た。奥様が亡くなられては後添いをもらわれるということから、このような人数になられたのですが、貧しい時代も長かった一生を思いますと、子育ては大変でおられたことと思います。

しかし授かつた尊い命ですから、なんとしても育てずにはおかないという強い思いから、この多くの子供たちを育て上げられ、皆それぞれに新たなお寺を起こされるなど活躍されて、浄土真宗の興隆に寄与されました。

この蓮如上人の思いは、その後も浄土真宗信者に受け継がれ、浄土真宗信者が多い土地（特に北陸から越後）では、江戸時代末に至るまで、間引きといった習慣は全くなかつたと言われています。

さていよいよこの頃から、林徳寺住職の先祖が浄土真宗に関わってきます。

この時代の林徳寺住職の先祖は、眞谷またに徳誓とくせいといひます。この方が、蓮如上人が石山御坊を建てる際にお手伝いをし、その完成とともに撰津国せんつのかくに西生郡林寺はやしじに居住したと伝えられています。



林徳寺の紋は、上にある八藤紋はつとうもんの中に「林」が入ったものです。

この八藤紋は、連枝れんしと言われる、歴代の御門主の一族にしか許されない紋なのですが、なぜか林徳寺に伝わっています。

石山御坊建立の際などの功績に対して、蓮如上人から頂戴したと言っていますが、真偽のほどは不明です。

ただ蓮如上人はチョウチョがお好きだったそうで、八つの藤の花が二つずつ組み合わさり、そこから蔓が伸びている様子が、四羽のチョウチョにも見えて、もしかしら本当の話かも：と、少しその気になつてしまつたりもしています。

その後の林徳寺先祖に関わるお話は、次号以降にご期待ください。

永代供養墓を建立

最近、日本各地で永代供養墓の建立がなされています。それに伴う新聞広告などをご覧になることも多いかと思えます。

「永代供養墓」とは、やむをえない理由でお墓の管理を継続できない方に代わって、その寺の住職が責任を持って、寺の存続する限り納まったご遺骨の供養を執り行うことを目的としたお墓です。

一般業者も同じようなお墓を販売している例がありますが、業者が何らかの理由で撤退してしまった場合など、不安があることも事実です。

お寺の墓地であれば、一般業者よりはそのような不安は少ないのではないかと思います。

そのような時代の要請もあって、このたび林徳寺も境内に永代供養墓を建立いたしました。

下の写真のように、全体は3室に分かれています。左右の2室には骨壺に入れたご遺骨を全部で60体以上お預かりするこ

とができます。

その後13回忌を目途に、中央の合葬墓にお骨のみを納めさせていただく予定です。

また左右に大きく伸びた石の壁には、納まったご遺骨のお名前や法名を記載した石版をおかけします。全体で二二〇名程度の方の石版をかけられる予定です。

7月6日（水）には、住職など三名の僧侶で読経をして建碑式を執り行いました。

その様子が下の写真です。あいにくの小雨模様でしたが、家族はもとより、工事をしてくださったトーア株式会社社長様、林徳寺の代表役員・門徒総代の岡田様など



にも参列いただいた際の建碑式は、厳かな行事となりました。

先に記載しましたようにこの永代

供養墓は、個人のお墓を建立し、その後も継続して管理することが何らかの理由で難しいと考えられる方で、希望される方のご遺骨をお預かりして、林徳寺住職が責任をもって供養を続けるためのお墓です。必要な手続きの方法や経費など詳細は、住職にお問い合わせていただければと思います。

現在林徳寺門徒ではないお方も、新たに林徳寺門徒になってくだされば、もちろんこのお墓に入らせていただくことは可能です。